

シェイクスピア悲劇の温度

A Study on the Colors Used in Shakespearian Tragedies

川崎 正美¹⁾

Masami KAWASAKI

In Shakespearean days, there were almost no lighting equipments. So Shakespeare needed to use words very carefully to arouse the imagination of the audience. I have been analyzing the frequency of the color words in the Shakespearean plays. I sent out questionnaires to 40 of my students in my school and asked them how hot or cool they felt when they saw or heard a variety of color words. I explained the temperature of “A Midsummer Night’s Dream” in my last paper. In this paper, I analyzed the frequency of the color words in the “Tragedies.”

Keywords: Shakespearean plays, color words, frequency, “Tragedies”

1. はじめに

人は色によって寒暖を感じるが、一体何度くらいに感じているのだろうか。東京都立産業技術高等専門学校の40人の学生たちに協力を依頼してアンケート調査を実施し、色を何度くらいに感じているかについて統計をとった。そのデータを基に“A Midsummer Night’s Dream”について検討を加えたのが前回の論文であるが、今回は同様の手法で、シェイクスピア悲劇10作品(“Antony and Cleopatra”, “Coriolanus”, “Hamlet”, “Julius Caesar”, “King Lear”, “Macbeth”, “Othello”, “Romeo and Juliet”, “Timon of Athens”, “Titus Andronicus”)についての調査を試みた。

例えば“Antony and Cleopatra”において使われている色彩を表す単語は、赤0回、オレンジ0回、黄色0回、緑3回、青1回、ピンク0回、紫1回、茶色3回、白2回、黒2回、合計12回である。“A Midsummer Night’s Dream”では40回も色彩に関する単語が使われていたことと考え合わせると、これだけでも作品のイメージはある程度想像できるが、本研究では、前回行った手法で色が持つ温度に着目して、作品の性格にアプローチした。

前回の調査で、赤に対して人が感じる平均温度は80.1℃、オレンジの平均は60.4℃、黄色は43.5℃、緑は28.9℃、青は12.8℃、ピンクは54.4℃、茶色は47.6℃、

紫は41.6℃、白は36.1℃という調査結果が出ている。“Antony and Cleopatra”において使われている色彩を表す単語の頻度にそれぞれの温度を掛け合わせ、平均値を求めると、次のようになる。個人によって感じる温度差の違いが多すぎるため、白と黒に関しては前回同様数値に加えないこととした。

$$(80.1 \times 0) + (60.4 \times 0) + (43.3 \times 0) + (28.9 \times 3) + (12.8 \times 1) + (54.4 \times 0) + (47.6 \times 3) + (41.6 \times 1) / 8 = 35.5$$

ということになる。4色8回と頻度は少ないが、作品温度は35.5℃と考えることにする。

2. その他の作品に関して

その他の“Coriolanus”, “Hamlet”, “Julius Caesar”, “Macbeth”, “Othello”, “Romeo and Juliet”, “Timon of Athens”, “Titus Andronicus”について、同じやり方で調査を試みたところ、以下の結論を得た。

“Coriolanus”については全4色が通算4回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$(80.1 \times 3) + (60.4 \times 0) + (43.3 \times 0) + (28.9 \times 0) + (12.8 \times 0) + (54.4 \times 0) + (47.6 \times 1) + (41.6 \times 0) / 4 = 72.0$$

“Hamlet”については全3色が通算6回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$(80.1 \times 2) + (60.4 \times 0) + (43.3 \times 0) + (28.9 \times 3) + (12.8 \times 1)$$

1) 東京都立産業技術高等専門学校 ものづくり工学科 一般科

$$+(54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0) /6=43.3$$

“Julius Caesar”については全2色が5回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*4)+(60.4*0)+(43.3*0)+(28.9*0)+ (12.8*1) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0)) /5=66.6$$

“King Lear”については全2色が4回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*2)+(60.4*0)+(43.3*0)+(28.9*2)+ (12.8*0) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0)) /4=54.5$$

“Macbeth”については全3色が5回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*2)+(60.4*0)+(43.3*0)+(28.9*2)+ (12.8*0) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*1)) /5=51.9$$

“Othello”については全2色が4回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*0)+(60.4*0)+(43.3*0)+(28.9*3)+ (12.8*1) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0)) /4=24.9$$

“Romeo and Juliet”については全3色が7回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*0)+(60.4*0)+(43.3*1)+(28.9*5)+ (12.8*0) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*1)) /7=32.8$$

“Timon of Athens”については全3色が4回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*0)+(60.4*0)+(43.3*2)+(28.9*1)+ (12.8*1) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0)) /3=32.1$$

“Titus Andronicus”については全2色が3回使われており、式に当てはめる結果は次の通りである。

$$((80.1*1)+(60.4*0)+(43.3*10)+(28.9*2)+ (12.8*0) + (54.4*0)+(47.6*0) + (41.6*0)) /14=46.0$$

3. 色彩が作品に及ぼす影響

得られた数値は“Coriolanus”の72.0℃を最高に、“Othello”の24.9℃まで広く分布している。“Othello”と“Romeo and Juliet”(32.8℃)を比較すると、温度は近いのだが、“Romeo and Juliet”では3色が7回用いられているのに対し、“Othello”では2色が4回使われているに過ぎない。この色遣いの違いによって“Romeo and Juliet”の若さに対して、“Othello”がもつ無機的な劇調という違いが生じてくるのではないだろうか。また、前回調査した“A Midsummer Night’s Dream”が40.1℃ということを考え合わせると、“Coriolanus”の72.0℃という数字は極めて高い。次いで高いのが“Julius Caesar”の66.6℃というのが興味深い。“Coriolanus”も“Julius Caesar”も共に史劇の色彩の強い作品であり、今後史劇に検討を加えることで関連性が見えてくるかもしれない。“Timon of Athens”では3色が4回使われているのに過ぎないが、そのうち黄色が2回も使われていることに興味をそそら

れる。日本人の感覚では黄色は爽やかさや若さを連想させ、好感が持たれる色かもしれないが、キリスト教では最も嫌悪される色であり、サッカーのイエローカードもこの符号言語色彩の影響があるのかもしれないと著者は考えている。いずれにしても、“Timon of Athens”においては32.1℃という温度よりも、黄色の用いられ方に大きな意味があるのかもしれない。これについては別に論じることにする。

4. 終わりに

今回は悲劇について検討を加えた。更に史劇や喜劇、ロマンス劇に対して検討を加えていくことでシェイクスピア作品全体の持つ傾向が現れてくると思われる。今後はほかの作品についても同様の検討を行い、シェイクスピアの色遣いについての検討を深めていくことにする。